

押杵帯九郎の肖像

—室蘭郡のアイヌを被写体とする画像資料に関する覚書—

大坂 拓

目次 はじめに

1 室蘭郡絵鞆村で撮影された写真

2 関連する画像資料

3 若干の考察

おわりに

Key Words

アイヌ (Ainu)、室蘭 (Muroran)、絵鞆 (Etomo)、押杵帯九郎 (Obikuro Oshikine)

はじめに

幕末の1867(慶応3)年に、箱館港に入港していたイギリス軍艦HMSサーペントの乗員フレドリック・サットンが同地に滞在中のアイヌを写真におさめ、それから30年後の1897(明治30)年には、フランス人映画技師コンスタン・ジレルが北海道を訪れ、アイヌを被写体とする最古の映像を撮影した。以来蓄積された膨大な画像資料は、写真集や絵葉書、映画など様々な形態で流通し、「かつて」のアイヌの姿を示すものとして、今も書籍や博物館展示、各種のメディアでたびたび引用され続けている⁽¹⁾。

こうしたアイヌを被写体とする画像資料については、従来いくつかの視点から研究されてきた。

一つは民族学・文化人類学的研究の立場からのものだが、こうした文脈では、しばしば本質主義的な文化観に立脚して、「正しい」アイヌ文化を「正確」に捉えたものかどうか、という視点から資料が選別されてきた。ここでは残されている画像資料の多くが、興行の場や観光地における「やらせ」に過ぎないとしてその価値を否定されてきた。こうした本質主義的な傾向は、1980年代以降の一連の批判にも関わらず現在も根強く残存しており、上記のような資料の性格を画像資料の「限界」とみなしたうえで、物質文化研究の補助的手段として用いたり、一般向けの刊行物に「演出が加えられた部分もあるが…貴重である」といった注釈を添えて挿図として用いる程度という状況を生んできた。そこには、演出のもとに撮影されたという事実もまた当時のアイヌの現実の一

端にほかならず、そこに写されたものも当時のアイヌ文化の一側面であるという認識が欠落している。

もう一つは、ポストコロニアルの潮流にのった写真研究の立場からのものであり、「まなざし」をキーワードとして、いくつもの重要な論点を示してきたことは疑いない。ただし、こうした検討の大部分はあくまでも「まなざした側」の営為に関するものであり、「まなざされた側」にあったアイヌに関する理解はほとんどの場合、歴史学の成果のごく皮相的な引用に留まっている。そのため、そこから導き出される議論は、断片的な事例をもとに大雑把な時間軸で和人／西洋のアイヌ観を論じる、やや紋切り型のオリエンタリズム・エキゾチシズム批判に留まりがちである。

今日、残された画像資料を十分な注釈なしに使用し続けることは、アイヌに対する歴史性を欠いた固定的イメージの再生産に加担することにほかならず、弊害が大きい。今後の課題は、他者によって「滅びゆく民族」の「標本」として対象化され、歴史から切り離されて「宙吊り」となった一人ひとりのアイヌの生を歴史につなぎ直す意識的な取り組み——写した側ではなく写された側に着目し、アイヌを客体としてではなく主体として捉え返す作業——にあると筆者は考えている。

以上のような認識のもと、筆者は近年、札幌郡の琴似又一郎の姿を取めた写真の再検討や、1876(明治9)年の天皇奥羽巡幸に際し歓迎行事に動員された開拓使函館支庁管内のアイヌの姿を捉えた写真の同定を進めてきた(大坂2022、2024)。最近では、「アイヌ風俗写真」を近代史研究の資料と位置付け、その分析を通じて渡島

大坂 拓：北海道博物館 アイヌ民族文化研究センター

(1) 本節前半で述べる内容は拙著『写真が語るアイヌの近代 「見せる」「見られる」のはざま』(大坂2025)と大きく重なることから、逐一の引用は省略した。

半島噴火湾沿岸の地域史を描き出すことを試みた（大坂2025）。

本稿ではそれらの取り組みに続くものとして、北海道立図書館が所蔵する金田一京助旧蔵絵葉書を糸口として、これまで撮影年代・撮影地・被写体が不明とされてきた資料のなかに、19世紀末～20世紀初頭に室蘭郡絵鞆村（現：室蘭市絵鞆町）に居住していた押杵帯九郎（アイヌ名：ウビシテクル）を写したものが複数含まれていることを明らかにする。

さらに、関係資料との照合によって、アイヌを撮影した最古の映像として著名でありながら、従来は撮影地が確定されてこなかった映画「蝦夷のアイヌ I・II」（1898年公開）、及び「消えゆく民 アイヌ」（1912年公開）もまた、同じ室蘭郡絵鞆村で撮影されたものであることを指摘する。

そのうえで、これらの画像資料を、押杵帯九郎ら室蘭郡に生きたアイヌに関する近代史資料として位置づけ直すことの意義について展望する⁽²⁾。

1 室蘭郡絵鞆村で撮影された写真

(1) 金田一京助旧蔵絵葉書

北海道立図書館が所蔵する金田一京助旧蔵絵葉書総数261点のなかに、「北海道旧土人夫婦ノスルメ製造ノ実景」という題が付された資料が含まれている（図1-1）。中央に二名の男女が立ち、両脇の魚干し棚には多数のイカがのれん干しにされている。二人の背後には海が広がり、その奥には特徴的な島影が見えている。

資料には被写体の人物について、「北海道旧土人夫婦」——すなわち北海道に居住するアイヌの夫婦であるという以上の情報は示されていない。男性は刺繍が施された木綿衣（色裂置文衣）を羽織ったうえに太刀を佩き、頭には冠を被っている。女性は暗い色調の着物を着用し、髪を鉢巻きでまとめている。男性の服装は日常着ではなく儀礼の際の晴れ着とみてよく、ここに収められた光景が「スルメ製造ノ実景」ではないことは明らかだが、いかにしてこうした一種異様な写真が撮影されたのかを、資料そのものから読み取ることはできない。

この資料は宛名面の下部二分の一が通信欄となっており、上部に「郵便はかき」と記載されていることから、おおよそ1918（大正7）年から1933（昭和8）年のあいだに発行されたものと見なすことができる。発行元として記されている「中井大正堂」は、大正期に北海道南

部の室蘭区大町（現：室蘭市中央町）で中井外吉が営んでいた書店であり⁽³⁾、上記の発行年代の理解と整合的である。ただし、これらの点は絵葉書が作成・発行された年代を示すのみであり、素材となった写真の撮影年代を特定するには別の角度からの検討が必要である。

(2) 撮影地点及び日時の特定

図1-1に極めて類似した写真が、1911（明治44）年9月発行の雑誌『日曜画報』1巻36号に収録された記事「一日一信」に、「盛装のアイヌ押杵帯九郎（水哉写）」とのキャプションを付して掲載されている（図1-2）。図1-1と比較すると、撮影角度にわずかな違いがあり、図1-2では後方に子供が映っているのに対し図1-1ではないといった微妙な差異も認められるものの、その他は細部にわたって一致しており、両者はほぼ同時に撮影されたものとみて間違いない。

記事によれば、執筆者の坪谷水哉（本名：坪谷善四郎）はこの年の8月20日に室蘭を訪れ、「鉄道院の小蒸気船で、室蘭港の内外を案内せられて、絵鞆村の土人部落に上陸」し、「珍らしく烏賊の大漁で、家ごとに烏賊を乾かす壮観を眺め」、「部落の酋長を訪うて撮影」したという。

坪谷の著書『新山水行脚』（坪谷1912）には、訪問の経過がより詳細に記されている。やや長くなるが、重要な内容を数多く含むためここで確認しておきたい。

聞けば今年は此の近海に、近年稀なる夥多しき烏賊が群がり、彼等漁船は其れを釣りに行くのな相だ。余等の汽船は楫を転じ、絵鞆村のアイヌ部落に着た。何れの家も、庭から軒端から畠まで、一面に縄引きはって、烏賊を乾かすもの何千万尾という数を知らず。中には最早数日を経て鰯と成ったのもあれば今まだ籠から出したばかりなるを縄に懸けるもある。其等の烏賊の間を抜けつくりつして、林氏⁽⁴⁾先に立ち、アイヌ酋長の家を訪ふ。彼れは林氏を知れる者で、曾て小学校建設用地として、其住宅を寄附し、為に三組の木杯を賜わったことありとか。林氏と余とが、写真機掲げたのを見て、「先刻も海軍の人達が来て、私等に酒代呉れて写真撮て行た」と云う。「僕達も酒代は遣るから撮らせないか」と云えば、彼れは諾して直ちに婆さんと共に、葛籠の中から酋長の服装を取り出して着て戸外に出づ。此所も一面に烏賊を乾した傍に、老夫婦並び立てば、孫な

(2) 以下の記述では「土人」「旧土人」などアイヌに対する差別的な用語が頻出するが、あくまでも歴史的史料としての性格に鑑みたものであり、ご理解をお願いしたい。

(3) 『大日本商工録』（大正11年版）、『全国文具界大観』（大正13年版）による。

(4) 「林氏」は室蘭で坪谷の案内に立った鉄道技師の名である。



1 金田一京助旧蔵絵葉書 No.222 (北海道立図書館所蔵)



2 坪谷水哉「一日一信」掲載写真



3 室蘭市絵鞆町から大黒島を望む (2024年筆者撮影)

図1 被写体と撮影地の特定

る小児が、裸体で其の脚元に這う。酋長は胸まで垂れる白髯に、毛を飾った冠を戴き、蝦夷模様の刺繍したる上衣を着て、長刀を佩ぶ。婆さんは露西亜更紗で頭を包みて後ろへ垂れ、黒い上衣を着る。アイヌの盛装は仲々立派だ。余は写し了って彼れが名を問えば、室蘭支庁の官吏から命名して貰った相で、『押杵帯九郎。』（明治四十四年）

この記述をもとに図 1-1 を確認すると、人物後方に映る島影が室蘭港口に位置する大黒島と一致しており（図 1-3）、撮影地に関する坪谷の記述は正確なものと判断することができる。この写真は 1911（明治 44）年 8 月 20 日に、現在の絵鞆町 1 丁目付近から北を望んで撮影されたものと考えてよい。

(3) 被写体の特定

坪谷は、被写体の名を押杵帯九郎としている。河野常吉が編纂した『北海道史人名字彙 上』によれば、押杵は 1840（天保 11）年に後の室蘭郡元室蘭村に生まれ、その後、絵鞆村に移り、室蘭市街と絵鞆村を結ぶ道路の開削や子弟の教育のための学校開設、「無願開墾」と見なされていた土地の付与請願等に尽力し、1913（大正 2）年 11 月に死去したという（河野編 1979：152-153）。

1895（明治 28）年刊行の『函館教育会雑誌』113 号雑誌に掲載された「教育篤志の土人」と題する押杵に関する記事には、以下のような記載がある。

教育篤志者旧土人押杵帯九郎は、其居村たる室蘭郡絵鞆村は室蘭港の西北端に僻在し、児童就学の頗る困難なるを慨し、旧土人一般の慣習として学事の何物たるを解せざるに係らず、独り率先して分校設置の必要を説き、遂に全村を風靡し其の設置を願せしむるに至り、認可あるや校舎新築の資なきを以て、自己所有の居宅を無料にて校舎に充用することニケ年、爾来益々学事に斡旋し、遂に本年に至り村民各自応分の資材を義捐し、今や建築落成を見るに至れり、旧土人にして此事ある実に奇特なりとて、去月二十一日木盃一組道庁より下賜せられたり

こうした押杵の事績は、坪谷の記述とよく一致している。坪谷は室蘭で、同地に居住する和人の案内でアイヌ

の指導者に会い、その事績を聞き取り書き記すとともに、姿を写真におさめたのだった。

(4) 小結

以上から、図 1-1 に使用された写真について、以下の事実が明らかになった。

- A) 撮影日は 1911（明治 44）年 8 月 20 日である。
- B) 撮影地は室蘭郡絵鞆村である。
- C) 被写体となったのは押杵帯九郎夫妻である。
- D) 服装は、来訪者が写真の撮影を希望したことに応じて盛装に着替えたものである。
- E) 押杵の両脇に映る大量のイカは「近年稀なる」豊漁によるものである。

この時に撮影された写真のうち、坪谷の手になるものが『日曜画報』に掲載され、坪谷による別カット、ないしは同行した「林」が撮影した写真が、後に室蘭市内で文具店を営んでいた中井大正堂へと渡り、後年、写真絵葉書として販売されていたものと考えられる⁽⁵⁾。

2 関連する画像資料

(1) 絵葉書・写真集

押杵と推定される男性を被写体とする写真は、この他にも複数の現存が確認できる。

図 2 は背景紙の前に立ち、被写体の服装が一致していることから、スタジオで連続して撮影されたものと推定される。図 2-2・4 に写る男性は押杵、図 2-3 は図 2-1 で押杵らと共に映る女性を単独で撮影したものである。

図 3-1・2 も、被写体の服装が一致しており、図 2 とは別の機会に、やはり連続して撮影されたものと推定される。図 3-3 では、図 1-1 と同一の衣服（色裂置文衣）を着用している。図 3-4 には、「北海道胆振国室蘭郡室蘭町字エトモ アイヌ酋長 ラビシテクル」と記載されており、容貌による同定と一致する。

多数の人物の中に、押杵の姿が確認できるものもある。函館に所在した小島大盛堂書店が 1902（明治 35）年 12 月 28 日付で印刷、翌年 1 月 3 日付で発行した『蝦夷百風景』⁽⁶⁾と題する封筒入り写真集に含まれる、「3

(5) その際に、白黒写真では判別しがたい入墨が書き加えられたようだ。

(6) 筆者は 1903（明治 36）年 3 月 20 日付の第 2 版、1904（明治 37）年 8 月 10 日付の第 7 版、同年 11 月 5 日付の第 8 版について現物を確認しており、本稿にはそのうち第 2 版の画像を掲載した。国会図書館デジタルでは 1905（明治 38）年 8 月 8 日付の第 11 版が閲覧可能である（info:ndljp/pid/13901723）。札幌市中央図書館には、1906（明治 39）年 4 月 2 日付の第 15 版が所蔵されているとのことである（新妻達雄氏私信）。アイヌを被写体とする写真には様々な由来のものが用いられているようで、例えば 2 版の「11 土人の夫婦」は内田九一の写真館で撮影された「開拓使仮学校附属北海道土人教育所」の生徒である一方、「1 アイヌ集合の図」、「2 アイヌ婦人昆布採取の図」、「4 アイヌ酋長正装の図」、「10 アイヌ婦人食品行商の図」、「12 土人ヤカマイの図」、「14 土人及小屋之図」はしばしば田本研造の撮影とされるものである。



1 金田一京助旧蔵絵葉書 No.62 (北海道立図書館所蔵)



2 金田一京助旧蔵絵葉書 No.95 (北海道立図書館所蔵)



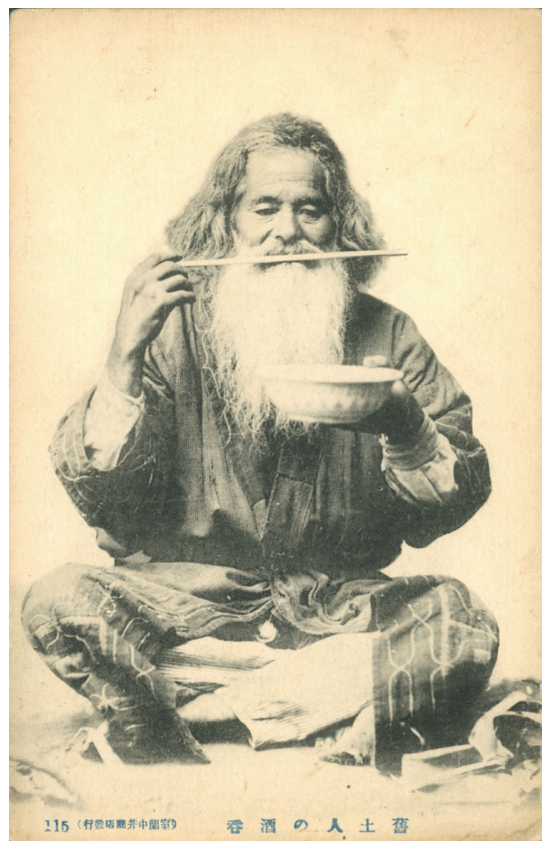
3 金田一京助旧蔵絵葉書 No.126 (北海道立図書館所蔵)



4 写真絵葉書 (新妻達雄氏蔵)



1 金田一京助旧蔵絵葉書 No.219 (北海道立図書館所蔵)



2 金田一京助旧蔵絵葉書 No.211 (北海道立図書館所蔵)



3 金田一京助旧蔵絵葉書 No.48 (北海道立図書館所蔵)



4 写真 (新妻達雄氏蔵)

アイヌ土人集の合図

3

アイヌ土人舞踊を爲さんと集りたる様なり



The picture, Aino Congregation.

1 『蝦夷百風景』図版3 (筆者像) 前列右から3人目が押杵帯九郎



北海道アイヌ人の風俗

2 写真絵葉書 (新妻達雄氏蔵) 前列左から1人目が図4-1左から2人目、同2人目が左から3人目と同一人物

図4 関連資料 (3)



1 金田一京助旧蔵絵葉書 No.238 (北海道立図書館所蔵)



2 写真 (新妻達雄氏蔵) 破線内が押杵帯九郎

図5 関連資料 (4)



1 金田一京助旧蔵絵葉書 No.37 (北海道立図書館所蔵) 前列左から3人目破線内が押杵帯九郎



2 写真絵葉書 (新妻達雄氏蔵) 破線内が押杵帯九郎

アイヌ土人集合の図」(図4-1)には、5名の男性とともにポーズをとる押杵の姿が確認できる。

「北海道大沼に於けるアイヌ土人の熊祭」と題する写真絵葉書(図5-1)は、従来、撮影地から近隣の茅部郡・山越郡のアイヌが関与したものと推定する意見もあったが、同じ儀礼を撮影した写真(図5-2)の中に図1-1と同じ木綿衣を着用した押杵の姿が確認できることから、室蘭郡のアイヌの人々によって実施されたものである可能性が高まったと言える。

図6は開催日時・場所は不明ながら、図5とは別の熊送り儀礼を撮影したものと考えられる。ここにも、図1-1と同じ木綿衣を着た押杵が写っていることから、やはり室蘭郡及びその周辺のアイヌが関与して実施されたものである可能性が高い。

これらの写真をもとに、直接押杵が写っていない写真の撮影地を推定することも可能である。一例を示せば、図4-2に写る人物のうち、前列左端の男性は図4-1の左から2人目、左から2人目の男性は同左から3人目と同一とみて間違いない。この資料もまた、絵鞆村の人々を撮影したものである可能性が高い⁽⁷⁾。

(2) 映像

1897(明治30)年に仏リュミエール社の技師コンスタン・ジレル(Constant Girel)が撮影し、翌1898(明治31)年に「蝦夷のアイヌ I・II」(Les Aïnos à Yeso I・II)と題して公開された2本の映画は、アイヌの姿を取めた世界最古の映像として著名である⁽⁸⁾。

この映像の撮影地については従来、状況証拠に基づくいくつかの推定が示されてきたものの、未だ見解の一致をみるに至っていない。宮尾大輔は2020年の著作 *Japonisme and the Birth of Cinema* のなかで、ジレルが撮影した集落は不明瞭だとしつつ、それが絵鞆である可能性を指摘している(Miyao 2020: 73)。ただし、これは旅程などに依拠した推測である。

「蝦夷のアイヌ I」には、4人の男性が並び踏舞(tapkar)を舞う様子が取められている。この4人のうち先頭の人物は眼鏡をかけており顔が明瞭に判別できないものの、着用している冠は図1-1で押杵が着用しているものとよく類似している。また、2人目、3人目はそ

れぞれ図4-1の左から3番目、2番目と同一人物であり、二人が晴れ着(色裂置文衣)の下に着用している衣服も、図4-1で着用しているものと全く同一である。この点を根拠として、撮影地を室蘭郡絵鞆村とした宮尾の推測が首肯される。

フランス・パテ社が製作し1912(大正元)年に「消えゆく民 アイヌ」(Un peuple qui disparaît, les Aïnos)と題して公開された映画は、撮影地に関する情報は伴っていないが、映像の背景に大黒島や室蘭港を挟んだ白鳥台方面の段丘が映っていることから、絵鞆村で撮影されたものであることは確実である。この作品のなかでは押杵が神への祈りの作法などを披露しており、その際、図2-1・2と同一の樹皮衣・冠・刀帯を身につけている。また、図6-1・2に写る複数の人物が登場しており、特に図6-1後列右端の人物は、押杵の息子とされている。

3 若干の考察

(1) 押杵の事績

押杵は近代初頭の時点でトキカラモイに居住していたが、1872(明治5)年に札幌本道建設に伴い移転を余儀なくされ、絵鞆に移ったことが知られている⁽⁹⁾。残された画像資料に切り取られたアイヌの姿は、一見すると、「かつて」の暮らしを維持しているかのように見えるが、実際には近代国家により大きな制約を受ける状態に置かれていたものだった。

押杵は1880年代には絵鞆村の「総代人」に選出され、1890年代には学校を誘致し、集落のアイヌ子弟に和人教師による教育を受けることが可能な環境を整えていた。1907(明治40)年以降は、官有地第三種として所有権が未確定のまま放置され、和人に奪われるおそれのあった土地について、「北海道旧土人保護法」などによる確保を試みる運動に乗り出していた。こうした一連の行動から浮かび上がってくるのは、映像に付された「消えゆく民」といったタイトルとは異なり、自らと集落の人びとの将来を切り開こうと行動する指導者としての押杵の姿である。

勿論、社会進化論が全盛であった当時あっては、自

(7) その他、フランスのケ・ブランリー美術館が所蔵する *photographies de Tamoto Kenzō* とされる写真にも、関連する資料が複数含まれている。同館はこれらの撮影地について絵鞆周辺と記載しているが、実際には少なくとも茅部郡落部村、山越郡山越内村(遊楽部)、室蘭郡、幌別郡の4箇所の資料が混在しており、注意が必要である。管理番号 PP0259675.2 は押杵を撮影した最も古い時期の写真の可能性のあるものである。また、同 PP0259672.1 には、『蝦夷百風景』で押杵の左に立つ男性が映っている。同 PP0259663、PP0259660、PP0259649、PP0259655、PP0259654、PP0259653 は茅部郡落部村、同 PP0259669.1、PP0259658、PP0259661、PP0259671.2、PP0259671.1、PP0259651、PP0259669.4、PP0259674.3 は山越郡山越内村(遊楽部)、同 PP0259657、PP0259656、PP0259659、PP0259662、PP0259673.1 は幌別郡幌別村で撮影されたものである。これらの被写体には、絵鞆村の押杵と同様に、落部村の板木三松、板切卯三郎、幌別村の金成喜蔵・安之夫妻ら、当時の各集落の有力者が多数含まれている。これらの写真は2025年12月24日現在、同館HP上のライブラリ (<https://collections.quaibrantly.fr/>) から閲覧可能である。

(8) この映像は2025年12月24日現在、国立映画アーカイブが運営する「映像で見る明治の日本」(<https://meiji.filmarchives.jp/lumiere-works/ML09-741.html>) で閲覧可能である。

(9) この点については本書掲載の資料紹介「近代室蘭郡におけるアイヌの土地に関するいくつかの史料について」を参照して頂きたい。

らの文化や言語を捨て、支配者のそれを学ばせるための学校建設を推進するという行為は、それ自体が「滅びゆく」過程と見なされていたに違いない。しかしながら、アイヌにとっての近代は、和人社会からの絶え間ない抑圧と差別の下において、日本語や日本文化を身につけつつ、なおアイヌと呼ばれ続ける状況のなかで展開してきた。これらの画像資料は、そのような過酷な状況の中で葛藤した人びとの姿を捉えたものとして、再評価される必要がある。

(2) 資料の「空白」となった室蘭郡

本稿で押杵を鍵として画像資料を同定した結果、室蘭郡で撮影された資料の数量は、山越郡や白老郡白老村、上川郡近文原野で撮影されたものに比べれば僅かとはいえ、近隣の虻田郡、有珠郡、幌別郡などに比べると目立った存在となった。特に、最古級の映像2点がこの地で撮影された事実は際立っている。

これらの画像資料が室蘭郡で撮影されたのは、その地理的条件と大きく関わっているだろう。20世紀初頭の北海道では、近世から玄関口として開発されてきた函館から、北海道統治の中心として急速に都市化した札幌に向かうには、函館から北上したのち茅部郡森港から海路室蘭港へと渡り、登別〜苫小牧方面を経由して北上するルートをとる場合が多かった。この沿線では森村にも少なくないアイヌが住んでいたものの、幕末には和人之との混住、文化の和風化が進んでおり、住民がアイヌとして表舞台に出てくることは既になくなっていた⁽¹⁰⁾。森村の北に位置する茅部郡落部村、山越郡山越内村、長万部村には函館近郊で最もまとまった人口のアイヌが居住していたが、そこに向かうためには先述のルートを大きく外れなければならなかった。室蘭郡、就中絵鞆村は、室蘭港から徒歩1時間ほどとやや離れているとはいえ、実質的に、函館から札幌に向かうルート上で最初に位置する大規模なアイヌ集落——訪問者にとっての「アイヌらしさ」を備えたそれ——だったのである。

こうした地理的条件に加えて、指導者である押杵がモデル料を受けとって撮影者を受け入れるという行動をとっていたことも、重要な要素として作用しただろう。

しかしながら、こうした状況は一時的なものであり、

1920年代には室蘭郡でアイヌを被写体とする画像資料が撮影されることは急激に減少したようだ。1920年代半ばから、室蘭郡から東に約45km離れた白老郡白老村で、和人移民の満岡伸一が仲介に立つ形で野村エカシトク、熊坂シタツピレらが観光業に乗り出し、鉄道駅からのアクセスが極めて良いことも相まって名所化した。1930年代には宮本エカシマトク、貝澤藤蔵が参入し、北海道でアイヌを「視察」するなら「旭川か、白老か」という状況が生まれていた⁽¹¹⁾。そして、より「純粹」な、「本当」の姿を求めようとする人々は日高沙流川流域へ向かった⁽¹²⁾。こうした状況のもと、アイヌの撮影を目的として室蘭郡を訪れる人はいなくなったものと考えられる。

ただし、当然のことながら、室蘭郡ではその後もアイヌの人々の歴史は連綿と続いてきた。資料の空白は、その地域に住んだ人々のアイヌとしての歴史が終わることを意味するものでは決してない。この点もまた、繰り返し確認されるべきだろう。

おわりに

本稿では、言語学者金田一京助が収集した写真絵葉書のうちの1枚を出発点として、室蘭郡で撮影されたアイヌに関する画像資料について検討してきた。

当然のことながら、検討を通じて撮影地・撮影年代が特定された画像資料からは、これまで知られていない民族誌的な情報を数多く引き出すこともできる。例えば、女性の多くが刺繍衣ではなく華やかな柄の和服をそのまま着用しており、それが儀礼用の晴れ着として機能していたものと考えられる点には、近隣の虻田・有珠・幌別・白老郡とも異なる地域的な独自性が看取できる。こうした情報は、当該地域に関する民族誌的記述が豊富とはいえないなかであって、重要なものとなるだろう⁽¹³⁾。

ただし、画像資料の読み取りの可能性をそうした「伝統文化」の側面にとどめることは、アイヌを再び人類学的研究の「標本」としての存在に閉じ込めることに繋がりがかねない。本稿で示そうとしたのは、そうした視線を相対化する一つの方法である。

(10) この点については『写真が語るアイヌの近代』（大坂 2025）の第2章「写されなかった村」を参照のこと。

(11) この点については『写真が語るアイヌの近代』（大坂 2025）の第5章「押し寄せる旅行者と観光地化をめぐる葛藤」を参照のこと。

(12) 一例として金田一京助は、「旭川市の近郊にある故を以て、よく近文に行くか、然らずんば、札幌から室蘭への順路の便宜で、胆振の白老へ下車をする」としつつ、「尚本当の見学をするには、やはり沙流である」としている（金田一 1930）。この当時既に、観光名所としての近文・白老と「本当」の「古態」に触れることができる沙流川流域という、20世紀後半にまで続く認識が形作られていることが分かる。

(13) 別の視点として、金田一京助が押杵を被写体とする絵葉書を複数所持していたという事実と、押杵が金田一の北海道踏査に際し最初のインフォーマントとなった人物であることを結び付けた議論も展開できるかもしれない。ただし、それは筆者が関心を寄せる「アイヌ史」ではなく、和人をはじめとする外部からの「アイヌ研究史」に属する問題である。従来の研究にはしばしば、アイヌが対象化されてきた歴史をアイヌの歴史そのものと混同していると思われる部分があり、その点の峻別により意識的になる必要を感じている。

謝辞

本稿の内容の一部は、2025年5月24日にフランス・パリ日本文化会館で実施した講演「アイヌ民族を撮影した最古級の映像とその被写体」で発表した内容を基礎としている。筆者に貴重な機会を与えて下さった同館の全てのスタッフの方々に対し、改めて深く感謝申し上げます。また、講演の準備、及び本稿の取りまとめの過程では、北海道アイヌ協会、室蘭アイヌ協会に大変お世話になった。特に押杵帯九郎の写真を使用することをご快諾くださったご子孫の方、現地調査に際してお世話になった方々に、心より感謝を述べたい。新妻達雄氏からは今回も多くの貴重な御教示と、資料の提供を賜わった。関連資料の調査にあたっては北海道立図書館、北海道立文書館のお世話になった。末筆ながら、記して感謝申し上げます。

引用文献

- 大坂 拓 2022. 琴似又一郎の写真について —北海道大学附属図書館所蔵資料の再検討—. 札幌博物場研究会誌 2022: 1-7.
- 大坂 拓 2024. 1876年奥羽巡幸の奉迎に立ったアイヌの姿—「対雁に移る途上、小樽に上陸した樺太アイヌ一行」説の訂正—. 札幌博物場研究会誌 2024: 1-21.
- 大坂 拓 2025. 写真が語るアイヌの近代—「見せる」・「見られる」のはざま—. 新泉社.
- 河野常吉 2025. 北海道史人名字彙 上. 北海道出版企画センター.
- 金田一京助 1930. 樺太・北海道の人種. 改造社編. 日本地理大系 北海道、樺太篇. pp. 470-479. 改造社.
- 坪谷水哉 1911. 一日一信. 日曜画報 1(36): 19.
- 坪谷水哉 1912. 新山水行脚. 博文館.
- Miyao, Daisuke 2020. Japonisme and the Birth of Cinema. Duke Univ Press.

A Portrait of OSHIKINE Obikuro: Notes on Visual Materials Depicting the Ainu of Muroran District

OSAKA Taku

This paper analyzes a postcard formerly owned by KINDAICHI Kyosuke and currently held by the Hokkaido Prefectural Library, *Hokkaidō Kyūdojin Fūfu no Surume Seizō no Jikkei* (literally, “An Actual Scene of Dried Squid Production by a Married Couple of Former Indigenous People of Hokkaido”). We find that the photograph used for the postcard was taken by an individual who visited Etomo Village in Muroran District on 20 August 1911, and that the subject of the photograph was OSHIKINE Obikuro, the leader of the village’s Ainu community.

Building on this finding, the paper identifies that a significant number of photographs depicting the Ainu, which were previously considered to be of unknown place and date, include images that were taken in Etomo Village. It further demonstrates that

the films *Les Aïnos à Yeso I & II* (released in 1898), regarded as the oldest moving images depicting the Ainu, and *Un peuple qui disparaît, les Aïnos* (released in 1912), regarded as early Ainu visual records, were both filmed in Etomo Village.

The paper suggests that multiple factors contributed to the large number of photographs and films taken of Ainu in Etomo Village: its proximity to the main arterial route connecting Hakodate and Sapporo, known as the “Sapporo Hondō”; that Oshikine, the community leader, accepted tourist visitation in exchange for photographic fees; and that this period preceded the full-scale development of “Ainu tourism” in the neighboring area of Shiraoi.

